

学園都市に就職したけどブラックすぎワロエナイ

ドラ夫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

学園都市に就職した外部の人間達、というノリ。  
物語の裏でこんな話があってもいいかな、と。

昔投稿したもののリメイクです。

目次

科学者の場合	1
第2話	9

## 科学者の場合

私は東大卒の科学者だ。学園都市にそれ以上の大学がでてしまったものの、まだまだ一流大学であるここを卒業した私は学園都市に就職することにした。

外の世界に住む科学者にとって学園都市で働くというのは、とてつもないステータスなんだ。だが、狭き門のため、今年は私を含めた3人しか就職できなかったそうさ。

今までニュースでしか見た事なかった色んな機械を今から思いっきりイジれる。さらには超能力も使えるようになるらしい。

これでワクワクしないのなら、そいつは科学者失格だ。私は抑えきれない笑みを浮かべて学園都市に入った。

——今思えば、これは大きな間違いだった。もし学園都市でタイムマシンができて乗る事ができたら私は私をぶん殴ってでも止めるよ。



【03：24】

「ち、調整終わりました」

「はいお疲れ様、明日も8時に来てね」

「……はい」

——超絶ブラックだ。

学園都市に来た当時はいろいろ環境改善を頑張ってみたものの、全て徒労に終わった。

労働者組合を立ち上げようとしたけど、そもそもこの街には大人が少ないから人数が足りなかった。

職場を変えようにも、外からきた私には学園都市にはどんな企業があるのかもわからなかったし、辞めて外に帰るのは私のプライドが邪魔をした。

そもそも五年契約だから、辞めたら莫大な違約金を払うことになるのだが。

なにより辛いのが、娯楽が少なすぎる事だ。

ここは学生の街だという意味を、私は来るまでキチンと理解していなかった。

まず、酒がコンビニにない。置いてあるところも稀にあるのだが、残念ながら私が住む近辺にはなかった。

その上完全下校時間とかいうやつので、夜にはファミレスどころかコンビニすらやってない。死にたい。

それに帰りの時間帯になるとバスや電車も止まってしまっているため、まさかの自転車通いだ。科学の街にやって来て、まさかこんなローテクな通勤手段になるとは。

たまの休日に遊ぼうと思っても、全ての娯楽施設は学生向けだ。

学生用料金が格安で、大人用利用がかなり高い事もこの際目を瞑るが、そもそも大人向けとして作られていない。

さすがにこの歳にしてゲーセンに行くわけにも行かないし、レジャー施設もやれ『カップル専用』だの『最後の青春を残そう』だのそんなんばかりだ。

それに加えて能力開発は大人はできないそうで、踏んだり蹴ったりだ。

唯一の取り柄である研究も、宇宙船や兵器の開発といった所謂『花形』をやらせては貰えないと思っただが、まさかの『クローンの調整』なんていう訳のわからない仕事をさせられるとは思わなかった。

私がこの街に来て、初めて職場に行った日に様々な書類を渡された。そこで「この実験の事に関して詮索しないし誰にも喋らない」といった内容の書類に沢山サインした。

この時私は物凄くワクワクしていた。

こんな沢山の書類にサインしてまで秘密にする実験だ。「きつと学園都市のオーバートクノロジーの塊のような機械に触れられるのに

「違くない」と馬鹿な妄想をしていた。

蓋を開けてみれば、地味だが法に触れてしまう、微妙な研究だった。なんでもこの街に7人しかいないレベル5の1人の能力が、筋肉が動かない人達を治すために役立つのだが、彼女は忙しいために、遺伝子情報を提供してクローンを研究する事にして欲しいと言ってきたので、そのクローンを作っただとか。

しかしこのクローン達は常に調整をしなければ死んでしまう事が判明。

その調整をするのが私の仕事だ。

秘密守秘義務の書類を書かされたのは本人の同意があり、人類のためとはいえ、クローンを作るのが違法だからだと言われた。

私は学者であり、法律家ではないからその辺りの事はよくわからないが……

まあこれだけ大規模に行われている研究だ、きっと大丈夫だろう。

それでこの調整なんだが時間がかかるだけで目新しい物は全くない。

そりゃあ新しい病気の治療法が確立されれば人類のためになるし、そのために遺伝子情報を提供してクローンの作成にまで同意してくれなレベル5のためにも全力を尽くさせてもらってるが、「充実感があるか？」と聞かれれば答えは「NO!」だ。



最悪だ。

何者かがここ最近研究所を襲ってるらしいと言うのは聞いていた。しかし学園都市の便利屋みたいな事をしてるレベル5を雇ったから安心だ、と言われてたのに、見事に研究所は襲撃されな。

データも機材も、私がせつせと書いたレポートも何もかも木っ端微塵だ。

だが、少し喜ばしくもある。

いかに学園都市といえどあれだけの機材を再び集めるのは難しいだろう。となれば私は別の研究所施設に行く事になり、別の研究をする事になるだろう。

まさか次の研究所でもクローンの調整をする、何て事はないだろう。ここには五人ものクローンがいるのだ、これ以上いるなんて事はあり得ないだろう。

5年契約だからクビにされる事はない。

やっと毎日18時間も見ていたクローン達の顔を見なくて済むようになると思うと嬉しい反面、ほんの少しだけ寂しい気もした。

学園都市をなめていたのかもしれない。まさか3日で新しい機材が来るとは……

もう私はこのクローン達の調整を一生していくのかもしれない。そう思うとなんだか愛着もわいてきた。これまではただクローンと呼んでいただけ、折角だし何か名前でもつけようか？

まだ目を覚まさない、ビーカーに入った『彼女達』につける名前を考えながらの作業は、帰宅時間をいつもより1時間ほど遅くした。



「おはようございます、とミサカは今までお世話になった事への感謝の気持ちを表しながら挨拶します」

「おはよう。体に何か問題はない？」

「ありません、とミサカは豊満なワガママボディをチェックしながら言います」

「それは良かった、ホントに。ここまでやって問題があつたら、ホント私の学園都市生活なんだったのって感じだし……」

ああ、そうそう。これ、服ね。悪いんだけどここで着替えて。こんななりでも私一応女だし、恥ずかしくないでしょ？」

「わかりました、とミサカは裸を見られた事への恥ずかしさから早口

で答えます」

「結局恥ずかしいんかい」

私の予想は学園都市に裏切られてばかりだ。

なんでも彼女達はもうすぐ実験での出番らしく、ビーカーから出てきたばかりの彼女達はその後、何処か遠い施設に送られるそうだ。

一生付き合っていく覚悟を決めた途端にこれだ。まったく、私を何処かで監視していて、ワザと予想を覆してるんじゃないだろうか。

それと今日初めて口を交わす彼女達の感情は薄く、学習装置に不備があるのかとも思ったけどこれでいいらしい。

なんでも今回行う実験の際に過度な感情は不都合なんだそうだ。

筋肉が動かなくなる病気などを患ってる人達に対してのなんらかの配慮なのだろうか？漏れ出してしまう糞や尿を気持ち悪く思わない様に、的な。

しかしここまで反応が鈍いとは……

彼女達が目を覚ましたら一緒に買い物でも行こうと思ったがこれでは断られてしまうだろうか？折角の門出だと思つてこの日のためにお金おろしてきたんだけどな……

意外な事に彼女達は私との買い物に2つ返事で答えてくれた。

いつも白いシャツに黒いスカート、その上から白衣という女として終わってる格好をしてる私だ。もちろん、今時の子の服装など分からないし、流行りの店も分からない。

しかし今日は娘の様にさえ思つてるこの娘のシ初ョッピン陣グなのだ。偶には見栄を張つても良いじゃないか。

娘には尊敬されたいのだ。

「この服なんて似合うんじゃない？ちよつと試着してきなよ」

「わかりました、とミサカは意外にも貴女が可愛い趣味をしてる事に戸惑いながら試着室に向かいます」

いかにも手馴れてる、という風に服を勧めてみた。

暫くして、ミサカが試着室から出てきた。

下はフリフリとしたピンク色のロングスカート。上は白い花柄の



シャツ、その上から淡い水色のカーディガン。

私にしては、良いチョイスではなからうか。いや、単に元が良いだけかもしれない。

「どうでしょうか、とミサカは大きな期待と少しの不安を胸に問いかけます」

「大学でオシヤレ番長と言われた——いや謳われた私をして、可愛いと思うよ」

「ほっ、とミサカはあなたに容姿を褒められた事に恥ずかしがります」

正直この娘たちは非常に可愛らしい。なんとというか私の好みドンピシャだ。ロ、ロリコンちやうわ。

それは置いといて、気に入ったみたいだし、今日は彼女にこれを着て帰ってもらおう。

うーん、他の娘達もはやく起きないかな。

趣味とか自由時間がないから、お金は有り余ってるんだ。何かしらのプレゼントを買ってあげたいなあ。

まさか誰かと一緒に服を選んで、プレゼントする事がこんなに楽しいなんて。私も女の子だったってことかな。いや、この娘達とだから楽しいのかも。



「こ、これは！味の宝石箱やー！とミサカは熟練のコメンテーター並みの素晴らしい感想を述べます」

「いや、それ大分古いよ？テストメント学習装置のデータ古すぎない？」

私はミサカを連れてクレープ屋さんに来ていた。

私はイチゴ味を、ミサカはマンゴー味のクレープを食べている。

学生時代はスイーツ(笑)何てバカにしていたが、食べてみると中々どうして美味しいじゃないか。

「ミサカ、ほっぺの所にクリームが付いてるよ」

「わー恥ずかしい、とミサカはドジっ子キャラまで身につけてしまった己のポテンシャルに慄きながら言います」

「だから、ほっぺにクリームをつけるドジっ子とかちよつと古いつて……。ホラ、とつてあげるから頬出して」

私はポケットから颯爽とハンカチを取り出し、優しくミサカの頬を拭いた。昔はハンカチなんて持たなかったが、ミサカの前でかっこつけるために持つようになった。

「ありがとうございます、お姉様……とミサカは羞恥に頬を染めながら感謝します」

私はミサカの「お姉様」という言葉を聞いて、何だか危険なものに目覚めてしまいそうになった。



いよいよ今日は彼女が実験へと向かう日だ。最初はクローンとして見ていた彼女を今は実の妹のように思う。彼女も私をおねえさー  
—お姉ちゃんだと思ってくれていたなら嬉しい。

私も実験についていこうとしたのだが、「それだけはダメです、とミサカはお世話になったあなたへの全力の忠告をします」と言われてしまった。

お母さんに授業参観に来てほしくない子供のような物なのだろうか？とにかく、今日で彼女とはお別れだ。

いや、お別れではないか。

ここを出て行ってもメールや電話で連絡はとれるし、この娘の向こうでの生活が落ち着いたら会いに行く気満々だ。

これはそう、旅立ちだ。

私の元を離れ、人の役に立つために社会へ羽ばたいていく、旅立ち。

「はいこれ、プレゼント」

「これは……ヘアピンですか、とミサカはプレゼントを見つめて確信を持ちます」

「スイートピーのヘアピン。花言葉は『門出』と『優しい思い出』花言葉なんて科学者らしくはないと思うんだけどね」

「ありがとうございます、とミサカは感謝の言葉がそれしか思いつか

ない事に歯噛みしながら答えます」

「その言葉だけで十分だよ。大事なのは万の言葉で飾ることじゃなくて、一つの気持ちを込めることだ」

「最後まで、貴方には教わってばかりでした、とミサカは感謝の気持ちを込めて告げます。お姉様。さようなら……」

こうして私の可愛い娘は実験へと向かった。

そういえば、何処に行くのか知らされてない……

ま、まあ直ぐに分かるでしょ。

何てったってここは学園都市！居場所くらいデータに残ってるだろうし、それを後で見よう。

さて、次にビーカーからでてくる彼女達はどんな娘だろうか？私と仲良くしてくれるだろうか？何をして遊ぼうか？何をプレゼントしようか？

この娘達には輝かしい未来が待っているんだ。私にできる事は少ないけど、せめて華々しい門出を飾ってあげたい。

あの娘達の将来を思いながらの作業は、私の帰りをいつもより二時間遅くした。

## 第2話

俺は元は自衛隊に所属していた軍人だ。

今日から配属先が変わり学園都市での配属となる。これは珍しい事で、現に今年は俺も含めて3人しか学園都市に就職しないという話だ。尤も、俺の場合厳密には就職ではないが。

外の人間にとって学園都市に配属されるのは一種のステータスだ。その理由は色々あるが、軍人の俺にとって重要なのは兵器に関してだ。

日本国内で普通殺傷性のある兵器を持つ事は禁止されているが、学園都市では超能力者がいる事や、持ち出されては困る機密情報が多い事などの理由で、兵器の所持が許可されている。

しかもその兵器が俺たちの世界とは比べものにならないくらい高性能らしい。超能力者と高性能兵器で戦い学生達を正しい道へ導く、これで心が踊らなかつたらそいつは男じゃない。

俺は正義感と期待を胸に学園都市に入った。

——今思えば俺は本当に馬鹿だった。もし学園都市でタイムマシンが開発されたら、俺は俺を殴つてでも止める。



「1班は死体を片付けろ。2班と3班は俺と来い。相手はレベル4の発火能力者だ。一人、二人は死ぬことを覚悟しておけ」  
「了解」

——死ぬほどブラックだ。

配属された部隊は『ハウンドドッグ 獵犬部隊』。

名前を聞いたときは、アメリカとかにある特殊部隊っぽくてカッコいいなあ、とか思っていた俺は本当に馬鹿だった。

よく考えれば、猟犬なんてついてる時点でロクなものじゃなさそうなのに。

配属された初日、まず隊長にあつてもらうと言われた。

西端な顔の軍人が出てくると期待していた俺は、嬉々として初めての訓練に向かった。出てきたのは顔に刺青を入れた、強面の白衣のおっさんである。

軍人まで科学者とは、流石学園都市。恐れ入った。

「このルールは1つだあ、俺の命令は絶対。破ったやつは殺す」

ここは本当に日本のだろうか？

目の前の男の威圧感も、言葉の内容も、渡された装備も全て今から戦場に向かうそれだ。

そしてその考えは、あながち間違つてはいなかった。



「ぐあつ！」

「怯むな！撃て撃て撃て！」

「左から大型車！誰かRPG！」

「どいてろ！巻きぞえくらうぞ！」

「まずい、能力者だ！推定レベル3の念動力者！」

「レベル3なら多角面から押せ！」

「っ!?!しゅうりゅ——」

「まずい！2人やられた！カバー」

「了解！」

これが学園都市での仕事風景である。

所謂不良の集まりである『スキルアウト』との戦いが主な仕事なのだ、普通に殺し合いだ。

もう、学生にちよつと喝を入れるとか、そんは次元じゃない。だいたいどこに銃や爆薬を平気で持ち出してくる不良がいるのか、中東だってもう少し平和だ。

そしてなにより、能力者が本当に厄介だ。

奴らのせいで戦闘パターンが尋常じゃなく増えている。外での戦術など、この町ではまったく意味をなさない。

悪い事をした能力者の道を正して罪を償わせる、とか言ってたやつはすぐに死んでいった。

どうやらこの街では能力のレベルが高いほど偉いらしく、差別が激しい。

当然、レベルどころか超能力者でさえない俺達大人はこの街では最底辺の扱いで、うっかり街を1人で歩こうものなら、あつというまに絡まれる。

あいつら、大人を舐めきってやがる。

だが、俺たちは能力者とも互角に戦える。

戦い方を教えてくれた人は、意外な事に隊長だった。

この人は見た目がいかつくて、言葉遣いも荒いが、頭が良くて、言うことはいつも正しい。なにより、レベル4以上の能力者にさえ1人で戦い、勝つ。あの人は部隊全員の憧れだ。

そして当然、俺もあの人に憧れている。



今日は稀にある、高レベルの能力者達の戦いの後始末だ。

この仕事は本当に辛い。

まず規模が大きいために目撃者が多く、そいつらを黙らせないといけない。

しかし、ここは学生の街。目撃者もまた学生で、あいつらはすぐに拡散させないと気が済まないたちらしい。直ぐにSNSや電子掲示板の類に書きやがる。

部隊の何人かがSNSなどにアップされた情報を消しながら、目撃者の顔を監視カメラの映像やSNSのアカウント情報から特定して、俺たち実働部隊が脅しに行く。

この目撃者が高レベルの能力自慢だった場合もまた厄介で、対処出

来ない時はたびたび隊長の世話になる。

この時俺はいつも自分の力のなさに情けなる思いだ。

そして戦いがあつたということは敗者と勝者がいるわけだ。

喧嘩両成敗という事で、俺たちは能力者にお灸を据えに行く。高位能力者に度々争われると、色々と困るのだ。

大人しく捕まって牢獄に入ってくれるといいのだが、今まで大人しく捕まった学生はゼロだ。

やはり大人がほとんどいないという状況で育つと、罪を犯したら罰する、という意識を生み出し辛いのだろうか。

さて、今日の仕事はなんでも「スクール」とかいうやつらの起こした戦いの後始末らしい。そんな名前のスキルアウトは聞いた事がなく、名前からしてもなんだか平和そうだ。【学校】だなんて、どれだけ学校好きなんだそいつら。今日は早く帰れるかもしれないな。

——なんて考えてた時期が俺にもありました。

これほどの規模の戦鬪痕を見たのは初めてだ。流石の学園都市でも、こんなに街がメチャクチャになっているのは見たことがない。

まず物理的被害の量が尋常じゃない。

ここに隕石が降ってきた、と言われても納得できる程だ。

これを埋め立てるのは別の部隊の仕事で、パワースーツを使ってえぐれた地面を埋め立てていく。俺たちはその間に潰れた死体や、地面に埋まった死体を回収しなければならぬ。

学園都市では超能力や兵器が普通に使われるため、しょっちゅう死体が出来る。

特に超能力による死体はグロく、発火能力による半焦げの焼死体や、念動力によって皮が剥がされた死体を最初に見た時は、流石に1週間ほど肉が食えなくなった。

それでも隊長が「俺の部隊によええ奴はいらねえ！」と言いながら焼肉をおごってくれた事で、部隊のみんなは覚悟を決めて肉を食った。

実は俺は途中で一回吐いちゃったけど……

死体をあらかた片付け終わると、次は情報操作や口封じだ。

最早手馴れたものだ。その後はメイインディッシュともいうべきか、問題を起こした超能力者の制裁なのだが、今回はしなくて良いらしい。

なんでも【スクール】は上からの命令で動く特殊部隊なのだそうだし、後で隊長がこっそり教えてくれた。

俺たちのハウンドドッグ猟犬部隊と同じ様なものなのだろうか？ それならもうちょっとそれっぽい名前にしろよ、なんだよ【学校】って。勘違いするだろうが。

◇◇◇◇◇

「おう、ちよつと練習付き合えや」

「はい！ 自分でよろしければ！」

今日は隊長に呼び出され、共に訓練をすることになった。

何かを隊長から教わることは良くあったが、何かの訓練に付き合うのはこれが初めてだ。待ち望んでいたことでもあるが、俄かに緊張もする。

今日、この部隊編成以来の大規模作戦がおこなわれようとしている。

作戦内容はとある人物の捕獲。コードネームラストオーダー打ち止め、本名は明らかされていない。

見た目はどっからどう見てもただの少女だが、この街では外見なんてなんのあてにもならない。

そしてこの少女を護衛するのはレベル5、しかも序列第1位。まず間違いなく死人が出るだろう。いや、全滅さえあり得る。

だがみんなが気にしている事はもう1つある。なんとこの第1位の男、隊長が育ての親らしいのだ。

俺たちは最早死を覚悟で隊長についていつてる。しかし、いやだか



からこそ、隊長の子供を殺す事はためらわれた。だから俺は作戦前日、初めて隊長に意見した。

「そういうわけで俺があのがきを殺すからてめえらはこの女を誘拐してさっさと逃げろ」

「隊長、俺にやらせて下さい」

「てめえ、何年俺の部隊にいらんだ。俺の意見は絶対だ」

「隊長！俺からもお願いします！」

「俺も志願します！」

「いえ、俺がやります！」

「俺に任せてください！」

「ダメだ！あのがきの能力には人数がいくらいても意味がねえ」

「能力を発動させる前に倒します！」

殺られる前に殺る。

これは隊長が教えてくれた対能力者へのセオリーだ。

「チツ、勝手にしろ」

「「「ありがとうございます！」」」

「命令だ、絶対帰ってこい。そしたら居酒屋に連れていつてやる」

学生の街である学園都市では居酒屋の件数が少なく、値段はバカみたいに高い。

作戦決行日。

作戦はシンプルに後ろから気がつかれないように車で接近して轢き殺す、というものだ。

……多分この作戦は失敗する、俺は死ぬだろう。だがそれでいい、少しでもあの能力者のバッテリーを減らせれば、バッテリー切れを起こして能力が使えなくなれば、能力者を無力化して生け捕りにできれば、隊長は自分の子供殺さずに済む。

隊のみんなも俺の考えをわかっているようで、遠くからの狙撃の案などは出なかった。

さあ、行くぞ！



「オマエの皮膚の皮五割を剥いでやる。それまでまだ生きてたらゆるしてやるつつつてンだよ」

やはり、作戦は失敗した。仲間たちが次々と車で近づき、周囲を取り囲んでいくが、意味がない事はわかっている。

「演出ゴクロー。——華々しく散らせてやるから感謝しろ」

結局みんなで命をかけても20秒もたせられなかったか、そう思っただけを覚悟していると、

「だーから言っつてんじやねえかよお」

……隊長どうして、

「あのガキ潰すにゃこんなもんじや駄目なんだよ。ガキイあいてだからって甘い事ばっかしやがって。だから最初から俺が出るつつつてんじやねえか」

駄目だ俺は。覚悟を決めたはずなのに、嬉しくて涙が出てきた。

その後隊長はあつというまに<sup>最強</sup>レベル5をボコボコにした。しかも、殺してはいない。

この人に勝てる人類はいるんだろうか？

